

大分の緒方三郎惟栄始祖伝説・国宝宇佐八幡宮伝承と韓国 その伝承地を訪ねて

金 賛 會

要旨

大分県豊後大野市には豊後国武将・緒方三郎惟栄の始祖誕生を叙述する「緒方三郎惟栄始祖伝説」が存在する。それは美しい娘のもとに大蛇の化身である素性の知れない水色の狩衣を着た不思議な男が夜な夜な通いつめ、やがて娘は身ごもりその娘から英雄が誕生したというものである。この伝説は韓国古代国の一つである後百済国の始祖である甄萱將軍の由来を叙述する「甄萱伝説」ときわめて類似している。

本稿では大分の緒方三郎惟栄始祖伝説・国宝宇佐八幡宮の伝承地を訪ね、昔話「芋環型蛇婿入り」に属する大分の「緒方三郎惟栄始祖伝説」と「国宝宇佐八幡宮」の八幡伝承とのかかわり、さらには「緒方三郎惟栄始祖伝説」ときわめて類似している韓国の後百済国の始祖伝説の「甄萱伝説」を紹介し、その関わりを探る。

また、国宝宇佐八幡宮の伝承では、小倉山（龜山）の麓、菱形池のほとりで鍛冶屋の翁がその姿を見せ、金色の鷹となり、あるいは金色の鳩と化すなど不思議なことが起きたとなっているが、鷹は鍛冶の翁の化身であったことが考えられる。このことは製鉄王国と言える伽耶国の金首露王神話において、伽耶の首露王が脱解^{はいたか}というものと王位争いの競争で、脱解が変身して鷹になると首露王は鷲と化し、脱解が雀になると首露王は鷓鴣と化して、脱解を降伏させる趣向ときわめて類似しており、宇佐神宮の八幡伝承との関わりが注目される。本稿ではこうした「国宝宇佐八幡宮」の伝承と韓国の伽耶国の始祖神話である「金首露王神話」との関連についても具体的に考察する。

キーワード：緒方三郎惟栄始祖伝説、国宝宇佐八幡宮伝承、芋環型蛇婿入り、後百済国の甄萱伝説、伽耶国の始祖神話、金首露王神話

1. はじめに

毎年の春、ゼミの学生たちを連れてよく訪ねる所がある。そこは日本民俗学の創始者の柳田國男によって日本全国の「炭焼長者説話」の発祥地とも言われている大分県豊後大野市である。筆者も以前「日・韓文化の比較 大分県の「真名野長者物語」と韓国の「薯童物語」¹⁾において豊後大野市に伝わる真名野長者物語と韓国との関連について詳しく述べたことがある。別府市内から自動車でも十号線道路に沿って大分市方面に向い、さらに南に約一時間ぐらい走ると豊後大野市に到着する。

予算を節約して行政の効率化を推進する日本政府の市町村合併政策によって二〇〇五年三月、三重町、清川村、緒方町、朝地町、大野町、千歳村、犬飼町の五町二村が合併して誕生したのが豊後大野市である。大分県西南部に位置し、今もきれいな水が相変わらず流れる大野川の上流に位置している。東西約二十二キロメートル、南北約三十一キロメートル、総面積六〇三.三六平方キロメートルで大分県土地の九.八%を占める所である。

豊後大野市は韓国の全羅北道益山市ともとても縁が深い都市でもある。筆者が豊後大野市文化財保護審議会会長の芦刈政治の呼びかけで真名野長者伝説の類似説話として韓国の薯童伝説を紹介したのがきっかけとなり²⁾、その後、韓国の「益山教員郷土文化研究会」と豊後大野市の「真名野長者伝説研究会」、立命館アジア太平洋大学の学生たちの相互訪問交流などが始まり、これが縁になって

二〇〇五年 八月 二十日 益山市と豊後大野市が友好交流協定を結んだ。おそらく共通の伝説がきっかけになり、両市が友好交流協定を結んだことはとても珍しいことであろう。

本稿では昔話「芋環型蛇婿入り」に属する大分の「緒方三郎惟栄始祖伝説」と「国宝宇佐八幡宮」の八幡伝承とのかかわり、さらには「緒方三郎惟栄始祖伝説」ときわめて類似している韓国の後百済国の始祖伝説の「甄萱伝説」を紹介し、その関わりを探り、さらには「国宝宇佐八幡宮」の八幡伝承と韓国の伽耶国の始祖神話である「金首露王神話」との関連について考察してみたい。



韓国の善童説話ときわめて類似している「真名野長者伝説」が伝わる豊後大野市の蓮城寺

2. 韓国後百済国始祖の「甄萱伝説」

大分県豊後大野市には全国的に有名な真名野長者伝説以外にも豊後国武将・緒方三郎惟栄の始祖誕生を言う「緒方三郎伝説」が存在する。それはまた韓国古代国の一つである後百済国の始祖である甄萱將軍の来由を叙述する「甄萱伝説」ときわめて類似している。まず、韓国の「甄萱伝説」の内容を紹介すれば次のようである。

光州の北村に金持ちがとてもきれいな娘一人と一緒に住んでいた。ある日、娘は父に「毎晩、紫色の服を着た男が訪ねて来て情を交わして帰ります」と言った。これを聞いた父は「長い糸を針に通してその男の服に刺しておきなさい」と教えた。娘が父の言う通りにし、夜が明けてその糸を辿っていくと、北側の塀の下に至った。そこには大きいミミズが倒れており、ミミズの横腹に針が刺さっていた。その後、娘は身ごもって男の子を生んだ。その子は十五歳になると甄萱と名づけられ、彼は八九二年に自ら王と称して今の韓国全州に都を定める。甄萱が赤ん坊のとき、父が畑仕事をしていて母がご飯を持っていくために彼を林の中におろして置いたところ、虎が来て彼に乳を飲ませた。村の人たちはこれを聞いて皆不思議に思った。子供が成長すると体格が大きくて風貌が人より抜きんでており、気品もすぐれていた。彼はもともと新羅国の人であったが、新羅の綱紀が乱れていたので反逆の心を抱き、武士たちを集めて西南州県を攻撃すると、いたるところの民が甄萱に従った³⁾。

3. 大分の緒方三郎惟栄始祖伝説

以上が「甄萱伝説」の要旨であるが、これときわめて類似している大分の「緒方三郎惟栄始祖伝説」を紹介すれば次のようである。

緒方三郎惟栄は恐ろしいものの子孫であった。豊後国の片山里にある人が夫を持たない美しい一人娘・花の本と一緒に住んでいた。その娘のもとに素性の知れない水色の狩衣を着た不思議な男が夜な夜な通いつめ、やがて娘は身ごもった。そのため、母は不思議に思い、「汝がもとへかよふ者は何者ぞ」と娘に問い尋ねると、「くるをば見れども、帰るをば知らず」と答える。そこで母は娘に「さらば、男の帰らむとき、しるしを付て、ゆかむ方をつなひで見よ」と言って、「男が帰るとき、糸を針に通して芋環をつけてそっと男の襟元に刺しなさい」と教えた。娘が母の言う通りにし、夜が明けてその糸を辿っていくと、日向国の境にそびえる嶮岳の大きな岩穴のなかに糸が続いていた。その中には巨大な大蛇が泣き叫んでおり、針が喉笛に刺さっていた。実は大蛇は嶮岳山(祖母山)の大明神であった。まもなく娘は大蛇の予言通り一人の男の子を生んだ。彼が緒方一族の始祖・大神惟基でその五代目の孫が豊後武士団の武将・緒方三郎惟栄という。惟基は母方の祖父が育てたが、まだ一〇歳にもなっていないのに背が大きく顔が長く風貌が人より抜きんでており、猛々しかった。夏にも冬にも手足が寒さのために皮膚がひび割れたので(あかがりひまなくわれれば)、「あかがり太夫」と言われた。

大分の緒方三郎惟栄始祖伝説・国宝宇佐八幡宮伝承と韓国
その伝承地を訪ねて

このように恐ろしい後裔なので九州国武士は平家一族に反逆を起こして惟栄に従った⁴⁾。

このように大分の「緒方三郎惟栄始祖伝説」と韓国の後百済国始祖伝説の「甄萱伝説」は每晚娘の部屋を出入りする男の正体がミミズと蛇という相違以外にはそのあらずじに大きな違いは見られない。ミミズと蛇は再生力の強い動物で、ミミズは「地龍」とも言っており、「緒方三郎惟栄始祖伝説」を伝える『平家物語』の絵巻では大蛇が龍として描かれている。

また両国伝説は「緒方三郎惟栄」と「甄萱」という武将の誕生説話を描いており、両武将は今まで仕えていた主君に反逆を起こすという点でもとても似通っている。甄萱伝説に見える「紫色の服を着た男」が日本大分の「緒方三郎惟栄伝説」では「水色の狩衣の服を着た男」になっているものの、これは生まれる子供の身分が高貴であることを示すものであり、日本の伝承はその男が水神であることを表すものであろう。

「甄萱伝説」では甄萱の母が畑仕事をしていた父にご飯を持っていくために彼を林の中におろして置いたところ、山神の化身と言える虎が来て彼に乳を飲ませて育てたとなっているが、神話学者である魯成煥氏によれば虎が訪ねてきて甄萱に乳を飲ませて育てたというのは甄萱が山の神の象徴となっている虎の精気を継承したものであり、甄萱の母系の呪術的根源が虎として象徴される山の神から由来していると見ている⁵⁾。これは緒方三郎惟栄の祖先神である大蛇が嫗岳山（祖母山）の山神の化身となっていることと相通じており、注目に値する点である。

4．緒方三郎惟栄伝説の伝承地

4.1 花の本姫を祭神とする宇田姫社

豊後大野市の中心地である三重町から自動車でも国道五〇二番道路に沿って竹田市方面に向くと県道四十五番が出るが、そこから左折して南方向へ 約二キロメートルぐらい走れば道路の右側に階段があり、その階段を上っていけば花の本を祭神としている宇田姫社が見える。

この神社が位置しているところは豊後大野市清川町大字宇田一四九三番地。ここは緒方三郎惟栄の始祖・大神惟基の母である花の本姫が住んでいた場所であるという。神社の正面から左側に洞窟が見えるが、こちらを通じてあの遠い嫗岳山に住んでいた大蛇が夜な夜な水色の狩衣の服装を着た男に変身して花の本姫の寝所を訪ねてきて情を交わしたと伝わる。洞窟からはきれいな水が湧き出て下に流れており、その水を汲んで口に含むとあまりにも美味しさに舌を巻いた。この洞窟は甄萱の誕生伝説を伝える韓国慶尚北道加恩邑のアチャ村のクム八窟とよく対応している場所である。



豊後大野市清川町の「宇田姫社」

4.2 緒方三郎惟栄の始祖・大神惟基が誕生した萩塚

宇田姫社を後にして南東の方へ四〇〇メートル位歩いて行くと、緒方三郎惟栄の始祖・大神惟基が出生したという萩塚が見える。惟基の母である花本姫が産産をする時、こちらにある萩を敷いて子供を生んだと言って付けられた名前であり、今も萩塚様として地域住民の信仰が篤い。

郷土史家でこの地域の歴史に詳しい豊後大野市文化財保護審議会会長の芦刈政治氏によれば、元々こちらには石で作られた石祠があり、後年、お堂を建ててその中に石祠を収めたという。また大神惟基は芦刈氏の遠い祖先にも当たるといふ。元々神様がいらっしゃる場所は外部の人には開放してはいけないが、芦刈政治氏の特別な配慮で小さい門を開けて中を覗いてみると、「稚元産所」という字が長年の歳月のせいか褪せてかすかに見えた。

ここには地域住民によるもう一つの産産伝説が伝わっている。境内の岩穴の中に姫と姥が住んでい

て、ここに若者が通ってきた。若者の衣の裾に針を刺して糸を辿りいくと、宇田から二キロの佃原あたりで若者は大蛇に返り苦しんでいた。姫は足で踏みつけ針を抜き取った。そのとき姫は抜けた蛇の鱗三枚を持ち帰った。姫は三つの卵を産んが、箱の中に入れ、百日間開けないように大蛇から言われていたのに、箱の中がまるで祭りのように賑やかなので百日にならないで開けてしまった。開け方が早すぎたので生まれた人も偉くならず、三方に散ってしまい宇田にとどまる人物がいなかった。三つの卵なのでこの地名を三玉といい、飛び散った先は臼杵、佐伯、緒方であった⁶⁾という。

産婦が産気づくと、こちらの萩様から萩枝をもらい、家に帰って敷いて頭を当てたりすると無事に出産できると伝わる。出産後にはその萩枝様に返して感謝のお礼参りをするという。今も祠の側には萩が立っていた。産婦たちがこちらの萩を折って家に持ち帰ったためなのか、萩にはいくつかの枝しか残っていなかった。そのため宇田地域の住民たちは毎年萩をまた植えて置くという。



豊後大野市清川村の「萩塚」

4.3 大蛇が住んでいた穴森神社

国道五〇二線に乗って竹田市の方面に向くと県道七号線と交差するが、そこから南下して姫岳山に向って走ると、大分県竹田市大字神原地域が現れる。狭い稜線に沿って坂道を上れば穴森神社の鳥居が見え、鳥居を抜けてさらに奥の方に進んでいくと、豊後大神氏の聖地である穴森神社の拝殿が見える。

実は穴森神社の身体は拝殿の奥にある岩穴である。いわば自然神そのままが神体となっているのである。この洞窟を探して拝殿の裏側にある階段を下っていくと、真昼であるにもかかわらず周りが薄暗く、喉笛に針がさされ、泣き叫んでいる大蛇が今にでも現れるかのように身の毛がよだつ。そして階段からおりて右側を見ると驚くほど大きな岩穴があった。ここから大蛇がああ遠い清川村に住んでいる美しい花の本姫の家に毎晩通い情を交わして蛇の子を産ませたというのである。実はその大蛇は姫岳山の大明神の化身であった。

大蛇が住んでいたという岩穴を見学するため、参拝客のため設置しておいた電灯をつけて少し険しい階段を降りて入り口から恐れながら中に入ると、真夏にもかかわらずとても涼しく、中からヒュヒュとする音が聞こえてくる。この音はまるで今でも喉笛を針に刺され泣き叫んでいる大蛇がああ美しい花の本姫を必死で呼んでいる泣き声であるかのようなのである。

この地域の伝承によれば、元禄十六年十月二十日、波来合の百姓半十郎、今平、文助が農作業中に、穴森の方からの鳴動を聞き、村中の者と神酒を供えたが、その夜松明をともし、穴の中をさぐると、一つのしゃれこうべが発見された。これが相当古い蛇骨だとわかり、評議の上、江戸へ持参することになった。宝永二年三月二十一日、宮地御身分として、郡奉行吉田八郎兵衛が穴森へ来て蛇骨を箱に収め拝殿を建てた⁷⁾という。



穴森神社の入り口

4.4 侍女と乳母の悲しい死を伝える小松社と姥社

小松社と姥社と関わるもう一つの緒方三郎惟栄伝説が地域の人々によって語り伝わっている。

神原の穴森神社に大蛇が住んでいた。一方清川に宇田姫という大変な美人がいた。ある時、立派な装いをした男が宇田姫を訪ねてきた。乳母と腰元の小松が宇田姫に名前を尋ねるように勧めたので、姫は何日も尋ねてみたが、その男は何も言わなかった。そこで母と乳母と小松の三人が麻をなべて糸を作り、それに針をつけて姫に男の裾に刺すように言った。八日目の晩、姫がその通りにすると、男は悲

大分の緒方三郎惟栄始祖伝説・国宝宇佐八幡宮伝承と韓国
その伝承地を訪ねて

鳴をあげて逃げた。四人は糸を辿り後を追うと、神原の穴森神社の大きな洞穴に着いた。中には大蛇が呻いていた。何と針を刺したのは裾ではなく首元のところであった。大蛇の姿を見ても姫は驚かなかった。大蛇は再び男の姿となり、姫に玉手箱を渡した。他の三人は驚き、慌てて逃げ帰ったが、小松が倒れたところを小松社、乳母が倒れたところを姥社と言い、今にその名を残しているのである⁸⁾。

穴森神社から丘を下って県道七号線に乗って再び北東の方へ約 三十五分ぐらい戻ると上冬原地域が出、乳母が倒れたという場所が見える。また侍女の小松はここから 七、三キロメートル離れた下徳田地域で倒れて死んだと言い、人々はこの二人を弔うため神社を建立したという。

今もこの両地域には乳母が倒れたという所に姥社、侍女が死んだという所に小松社が残っており、大蛇の姿に驚かされ、逃げる途中で死を迎えた二人の下女の悲しい物語が今でも地元の方によって語り伝わっている。



「姥社」

4.5 緒方三郎惟栄と大神氏・三輪氏一族

小松社のある下徳田地域を抜け出し、再び県道七号線に乗って北上して約 十二分ぐらい走ると豊後大野市緒方町に「緒方三郎惟栄館跡」が見える。この館跡は緒方平野のほぼ中央、緒方川の北岸の低地に位置している。ここには小規模の緒方神社があったというが、大正時代に消失し、現在は石の鳥居と昭和十二年に建立したという顕彰碑などが残っている。

上で述べたように緒方三郎惟栄は姫岳山神で大蛇の子供といわれる大神惟基の五代目の子孫であると伝わる。このように恐ろしい子孫の後裔なので九州国の武士たちは平家一族武士政権に反逆を起こし、惟栄に従ったという。

一一八〇年から約 十年間古代日本では源氏と平家の武士たちが内乱を起こしてお互いに争う事件が起こるが、この戦争を源平合戦という。惟栄はこの戦争で大活躍をした豊後国の武将であると同時に今の豊後大野地域を統率する首長でもあった。

歴史的には緒方三郎惟栄の系譜についていくつかの説が存在する。今の大分県宇佐市にある宇佐八幡宮の宮司職をめくって惟栄の先祖である大神氏と宇佐氏が争ったが、大神氏がこの戦いで破れ豊後大野地域に下って土着勢力になったという。異説としては惟栄は九世紀末に豊後に赴任してきた大神良臣の息子であり、大野地域の郡領であった庶幾の子孫であるともいわれ、また中央の大和美和氏が直接豊後国に降りてきて豊後大神氏の先祖になったともいわれる。美和を漢字で表記すると「三輪」「大神」ともなり、三輪氏と大神氏は同族と言え、大神氏から出た緒方氏、佐伯氏、臼杵氏も皆同族とされる。



「緒方三郎惟栄館跡」

問題は美和の三輪氏が先なのか、今の大分県を中心とする豊後大神氏が先なのかである。

上にも述べたように記録の上では大和三輪氏が直接豊後国に降りてきて豊後大神氏の先祖となったとあるが、歴史は中央を中心に記録されるものであるため朝鮮半島と関連が深かったのが三輪(大神)氏であり、地理的、歴史的なことを考えても豊後大神氏が大和に移動したと見るのが妥当であろう。

4.6 宇佐八幡宮と緒方三社の原尻滝の川越し祭

恐ろしい大蛇の子孫といわれる惟栄はもともと平家側の平資盛の家人であったが、後にはこれに反逆し、源氏側について大宰府に滞在していた平家を攻撃して九州から追い出す。その後、平家陣営を助けていた宇佐八幡宮の宮司である宇佐氏を攻撃するため、宇佐神宮に侵入して火をつけ神宮を焼き

払う。

伝承によれば惟栄は宇佐神宮に火をつけて焼き払う時、矢が飛んで来て身に当たったが、神の怒りをかい、めりこんだ矢を抜こうとしても抜くことができなかった。それで自領に故郷である豊後大野市の緒方町に帰り、八幡神のための神殿を建立して神を祀ることなどを約束すると、刺さった矢も抜け、負傷した体もきれいに治ったという。

豊後大野市に帰ってきた惟栄は宇佐八幡神との約束通り、山(元宮)で矢を射て八幡神の居場所を探したが、最初の矢が落ちたところに一宮八幡社、第二の矢が落ちたところに二宮八幡社、第三の矢が落ちたところに三宮八幡社を勧請したという。一宮八幡社の祭神は応神天皇の父である仲哀天皇、二宮八幡社の祭神は応神天皇、三宮八幡社の祭神は応神天皇の母・神功皇后が祀られており、今も豊後大野市緒方町にはこれらの神宮が伝わっている。

毎年十一月中旬の土曜日と日曜日にこれら八幡神の合同祭が緒方町で開催されるが、一年に一度だけ、三宮八幡社にいる母神が子神に逢うために山をおり、息子のいる二宮八幡宮で一夜を過ごすという。母神のいる三宮八幡宮から息子の祀られている二宮八幡宮までは約二、三キロメートル離れており、そこへ行くためには原尻の滝を渡る必要がある。神輿に母神を乗せ冷たい川を渡る青年たちによる「緒方三社川越祭」が緒方町で今でも盛大に開催されており、この時になると大勢の観光客が原尻滝を訪ねてくる。

原尻の滝には恐ろしい人身御供の伝説が伝わっている。六月十五日、十九の娘で一番の美人を馬に乗せて生贄として原尻の滝にささげていた。それを聞いた緒方三郎惟栄は、「これより千年」と、石に彫って蛇を沈めたという。明治時代ぐらいまでは娘の代わりに藁人形を沈めていた⁹⁾という。

恐ろしい大蛇の後裔として知られる緒方三郎惟栄と関連した原尻の滝を探して姥社から県道七号線に乗って約九分程度北上すると、道路のすぐ側に特産品やレストランの位置している道の駅が見え、川の方を眺めると巨大な原尻の滝が目に入った。そこには観光客のための大きな吊り橋がかけられているが、久しぶりにその橋にのってみると、一年に一度だけしか逢えないという母神が愛するわが子のため、一生懸命に川を渡っていく姿がかすかながら見えるのはおそらく私だけの幻想ではないだろう。



「原尻滝」



「緒方三社の川越し祭」

5 . 国宝宇佐八幡宮・亀山と韓国伽耶の金首露王神話・亀旨峰

前述のように大神惟基の子孫で韓国の甄萱伝説と類似した始祖伝説を持つ緒方三郎惟栄は、今の大分県宇佐市にある宇佐八幡宮と深く関わる人物である。では日本の国宝で歴史上とても重要な役割を担ってきた宇佐八幡宮と朝鮮半島との関係はどうであろうか。

宇佐八幡宮は朝鮮半島の古代国の一つであった伽耶国の神を祀っているとされ、日本全体の神社の数は十二万といわれているが、その中の四万程度が八幡宮であり、宇佐八幡宮はこれら八幡宮の総本山でもある。

八幡神は第十五代の応神天皇で、別称では誉田（ホムタ）天皇といわれ、辛国（伽耶国）から渡来したとされる。「ホムタ」は「オムタ」と読み、これを漢字で表記すると、「大牟田」になり、これは伽耶系の百済王と推定される東城王の異称である「牟大」と同系列の名前であり、八幡神が古代伽耶国と密接な関連があることを示す。今でも九州には大牟田市などを含め、「ムタ」という地名が多く存在するが、これは古代九州と朝鮮半島がたくさんの文化的交流があり、これらの地名が残っているのは特に古代伽耶と百済との関係が深かったことが考えられる¹⁰⁾。

韓国の最高の歴史書であり、説話書とも言える『三国遺事』巻二の「駕洛国記」条には伽耶国の始祖・金首露王の由来を次のように記す。

開闢以来、この地にはいまだ国の名称もなく、それに群臣の呼び名もなかった。我刀干、汝刀干、彼刀干、五刀干などの九干が酋長となって民を治めていた。ある禊の日に彼らが住んでいた北側の亀旨峰（亀の伏している姿の山）から皆を呼ぶような不思議な声が聞こえてきた。九干をはじめ人々が集って行くと、人の声は聞こえるが、姿は見えない。その声は「ここに人がいるのか」と聞く。九干らが「私たちがいます」と答えると、さらに「ここはどこなのか」と聞く。「亀旨です」と答えると、「皇天が私を送って国を新しく建てて君主になれと指示したのでここに降りて来たのだ。お前たちは峰の頂上の土を掘りながら、<亀よ亀よ、首（首露）を出せ。もし出さなければ焼いて食べるぞ>と歌いながら舞い踊りなさい。すなわちこのように歌うのは大王を迎える良い兆しであるのだ」と言った。声の通りすると、紫の縄が天から垂れてきて地面についた。縄にしたがって行って見ると、赤いふるしきに金の箱が包まれている。その箱の中には六個の卵があり、その卵から子供が出てきたが顔は龍のようであった。彼らはそれぞれ六伽耶の王となり、首露が大伽耶の始祖王となったという。この時、ワン八国から脱解という者が来て、王座を奪おうとするので二人は変身術で競って決めることにした。脱解が変身して鷹になると首露王は鷲と化し、脱解が雀になると首露王は鷓はいたかと化して首露王の勝ちとなった。ある日、海の西南の方から赤色の帆をあげ、赤い幡を翻しながら北に向かって進んでくる船があった。臣下の留天らは駿馬と軽船を携えて望山島に行つて松明をあげてその船を迎えた。その中には首露王の后になる阿踰陀国の王女が乗っていた。首露王は宮殿から少し離れた南西側の山の麓に仮宮を作って王女を待った。王女は軽船に乗り換え陸地にあがり、高い丘の上で休んだ。首露王が仮宮の寢室に案内すると、王女は「私は海に浮かんで女の身でありながら恐れ多くあなたの龍顔に近づくことができました」と言った。首露王は仮宮で共寝して二夜を過ごし、また一昼が経た後、后を連れて宮中に戻ってきた。

以上が伽耶国の始祖の誕生神話であるが、宇佐八幡宮の神殿が位置しているところは、今の釜山近郊の金海市にある伽耶国の始祖である「金首露王」の生誕地とされる「亀旨峰」と同じ名前の「亀山」であり、両方とも山形が亀に似ているという。

宇佐八幡宮の祭神・八幡神は「馬城峰」に降り、いくつかの場所を経て、最終的には亀山に祀られており、はじめは白髪姿の鍛冶翁として姿を現したが、後には竹葉に乗った童子として姿を現す。

「馬城峰」の「馬城」の「城（キ）」は「那」と同じ「村」「国」または「場所」を意味し、「馬城」は「マナ」と同じで任那の伽耶国を意味し、また八幡神が鍛冶翁として姿を現したというのは八幡神が製鉄王国であった伽耶国から渡来したことを示すものである。

また八幡神が菱形池で竹葉に乗ってその姿を現したというのは八幡神が水神であることを意味し、韓国のシャーマンの巫神が竹葉に乗ってよくその姿を見せることと相通じる。

これは伽耶国が龍神である水神を祖先神とすることと同じであり、韓国ソウル大学の徐大錫教授が論じているように、亀は海神であり、伽耶国の金首露王神話の媒介動物は海と関係のある亀であり、その亀が始祖のいる場所を指示する存在と亀旨峰という誕生の場所が同一であることは亀が伽耶国の始祖神であることを示してくれる¹¹⁾という。

上述したように八幡神は最終的に宇佐神宮の「亀山」に降りて神として祀られるが、これは伽耶国の首露王が亀旨峰に降臨したのと同じである。おそらく伽耶国から移動してきた信仰集団が伽耶国の始祖の誕生地と似ている聖地である「亀山」に八幡神を祀ったと言えよう。

首露王神話では、「お前たちは峰の頂上の土を掘りながら、<亀よ、亀よ。首(首露)を出せ。もし出さなければ焼いて食べるぞ>と歌いながら舞い踊りになさい。すなわちこのように歌うのは大王を迎える良い兆しであるのだ」とあるが、これは掘った土を集めて盛り土にして、神壇を築き、神社と建てて始祖神の首露王を迎える儀礼が行われたことを意味するものと思われる。

宇佐八幡宮の立っている亀山(小椋山)の地形は亀の形をしているといわれ、『八幡宇佐宮御託宣集』巻三には「三に宮山、西方にあり、造営の時神壇を築き奉る等にこの山の土なり。故に宮山と云う」とあるが、これは宇佐神宮造営のときに宮山から土を運んで盛り土にして神壇を築いたことを意味することが考えられ、このことは具体的に韓国の首露王神話の伝承と一致していることがわかる。

享保八年(一七二三)四月、宇佐宮の三つの神殿が焼ける事件が起こるが、享保十二年修復工事のとき、「宇佐宮(亀山)の地形(地固め)作業は始める。郡氏子ら石・土運びに繰り出す」とあって、石や土の運びが宇佐宮にとってたいへん重要であり、神壇作りに盛り土が行われたことが考えられる¹²⁾。

亀山が自然の地形なのか、人工の盛り土の地形なのかが問題ではなく、亀山はもともと亀の形をしている山であるが、その上に神壇を作り、宮を建てる時に、亀の宿る土が八幡信仰集団において重要な意味があり、そのために土が使われたことは韓国の伝承からも推測できる。

従来、宇佐神宮が龍神(水神)である亀と関わる亀山に建てられたことについてあまり重要な意味を与えていない。しかし亀は土や水を媒介としてその姿を現すものであり、伽耶国の始祖・首露王も亀を媒介にしてその姿を現している。亀と関わる亀山に八幡神(応神天皇)を祀る神殿が建てられているのは八幡神が亀(龍神)であることを意味するものであり、亀がその姿を現すためには「土」はとても重要な要素であったと思われる。

宇佐神宮は上宮と下宮とに分かれているが、下宮は亀山の麓近くの西南の位置にあり、上宮が位置しているのは亀山である。八幡神は最終的に亀の形をしたこの亀山に降りたことになっており、そこに宇佐神宮の本殿が建てられたことの意味はとても大きく、首露王神話でも亀の伏した形をしている亀旨峰に首露王が降臨し、そこに神社を建てて神祭りが行われたことと推定されるのと同じである。

江戸時代までは宇佐神宮の上宮が位置している亀山は禁足地と思われ、一般人の出入りはかたく禁じられた神聖な所だった¹³⁾という。おそらく今日わずかの痕跡しか残していない伽耶国の始祖・首露王の誕生地である亀旨峰も古代伽耶国においては亀を媒介にしてその姿を現した龍神の首露王が誕生したとても神聖な場所であり、一般人には禁足の土地であったろう。

八幡神は、「筑紫豊前国宇佐郡厩峰菱瀉池の間。鍛冶の翁有り。甚だ奇異なり。是によって大神比義穀を絶ち、三年籠居精進す。即ち御幣を奉り祈り申す。若し汝神なる者なれば我が前に顕れるべし。即ち三歳の小児現れて竹葉に立つ。託宣に言ふ。我れ是れ日本人皇第十六代誉田天皇八幡麻呂なり¹⁷⁾」とあるように、八幡神がなかなかその姿を見せてくれないのでシャーマンの大神比義が禊ぎをして祈ると、三歳の小児と顕れ、後でその子が誉田天皇(応神天皇)になったというのである。

これは伽耶国の始祖神話でも北側の亀旨峰で神はすぐ姿を見せず、皆を呼ぶような不思議な声が聞こえてきたので九干たちが禊ぎをして、神の降臨を祈ると、卵が顕れそこから小児が出てきて、後でその子が伽耶国の始祖・首露王になったとあり、韓国の場合は卵生神話の形を取っているが、宇佐八幡宮縁起と非常に類似していることがわかる。ここで九干のなかで「我刀干、汝刀干、彼刀干、五刀干」というのが何を意味するのかが問題であるが、「我、汝、彼」は人称代名詞で、中心地から何々方向の分割統治地域を言えるものであり、さらに「我刀干、汝刀干、彼刀干、五刀干」と「刀」がついているのは彼らが製鉄の首長であることを示すものであろう。

首露王神話では「お前たちは峰の頂上の土を掘りながら、< 亀よ、亀よ。首（首露）を出せ。もし出さなければ焼いて食べるぞ > と歌いながら舞い踊りなさい」とあるが、これにはもう一つの意味が隠されている。亀は昔から神聖な動物として吉凶と運勢を占うのに使われた。『三国史記』巻第二十八百濟本記の義慈王条には、

百濟末の義慈王のときのある日、鬼神が宮中に入ってきて、「百濟は亡びる。百濟は亡びる」と大声で叫んでから土の中に入るものがいた。王は不思議に思って人に地面を掘らせてみると、そこには一匹の亀がいた。その通り百濟は新羅に滅ぼされた」

とあり、亀は国家の存亡運勢を占うのに使われていたことが考えられる。昔から亀の背中の皮を焼いてその割れる模様を解いて吉凶を占う亀卜が行われてきたが、首露王神話では「亀よ、亀よ。首（首露）を出せ。もし出さなければ焼いて食べるぞ」とあるのは、神社の中に盛り土をした神壇があり、そこで亀の甲を焼いて伽耶国の始祖・首露王の誕生を占ったものとも思われる。

宇佐八幡宮の付属の若宮殿の拝殿は中央が土間となっており、若宮殿は上宮と同じ亀山に位置しているが、昭和の修復以前まではその若宮神社では亀の甲を焼いてその割れる模様を解いて占う亀卜が行われた¹⁵⁾ という。

中央が土間となってそこで亀占いを行ったというのは、亀と土の深い関連を示してくれるものであり、宇佐神宮の亀卜の伝承から考えると、韓国の首露王神話において土を掘りながら、「亀よ、亀よ。首（首露）を出せ。もし出さなければ焼いて食べるぞ」となっているのは、伽耶国でも神聖な亀旨峰で亀卜が行われたことを示す。宇佐神宮の伝承と伽耶国の伝承が具体的に一致を見せているのはとても注目すべきことである。

宇佐神宮の禰宜を勤められた河野弥進美氏によれば、現在若宮殿では亀卜は行われていないという¹⁶⁾。しかし、宇佐神宮の下宮の西側には「兆竹」という場所が今でも残っている。「兆竹」とは亀の甲を焼いて占った後、その亀の甲の熱を冷ます必要があるが、これを「さまし竹」と言い、竹を切りスノコ状に並べその上に亀の甲を載せて熱を冷ましたことから付けられた名称であるという。

韓国の伽耶国の始祖神話からみて、宇佐神宮での亀占いはかなり古い時代から行われたことが推測できよう。

伽耶国の金首露王に対応する八幡神(応神天皇)は、『八幡宇佐宮御託宣集』巻五の「菱形池の辺の部」によると、

筑紫豊前国宇佐郡菱形池の辺、小倉山の麓に鍛冶の翁あり。奇異の瑞を帯び、一身と為し、八頭を現す。人聞いて実見の為に行く時、五人行けば即ち三人死し、十人行けば即ち五人死す。故に恐怖を成し、行く人無し。是に於て大神比義行きてこれを見るに、さらに人無し。但し金色の鷹、林の上に在り。丹祈の誓を致し、根本を問ふて云く。誰か変を成すや、君の為す所かと。忽に金色の鳩と化り、飛び来つて袂の上に居る。爰に知りぬ。神変人中を利すべしと。然る間、比義五穀を絶ち、三年を経るの後、天皇三十二年 辛卯二月十日癸卯、幣を捧げ、首を傾けて申す。若し神為るに於ては、我が前に顕るべしと。即ち三歳の小児と現れ、竹の葉の上に於て宣ふ。辛国¹⁷⁾の城に、始て八流の幡と天降つて、吾は日本の神と成れり。一切衆生左にも右にも、心に任せたり。釈迦菩薩の化身なり。一切衆生を度むと念ふて神道と現るなり。我は是れ日本神皇第十六代誉田天皇広幡八幡麻呂なり。

とあるように、小倉山（亀山）の麓、菱形池のほとりで鍛冶屋の翁がその姿を見せ、金色の鷹となり、あるいは金色の鳩と化すなど不思議なことが起きたとなっているが、鷹は鍛冶の翁の化身であったことが考えられる。このことは製鉄王国と言える伽耶国の金首露王神話において、伽耶の首露王が王位争いの競争で、脱解が変身して鷹になると首露王は鷲と化し、脱解が雀になると首露王は鶺鴒と化して、脱解を降伏させる趣向ときわめて類似しており、宇佐神宮の伝承との関わりが注目される。

その他、応神天皇は「三歳の小兒と現れ、竹の葉の上に於て宣ふ。辛国の城に、始て八流の幡と天降つて、吾は日本の神と成れり¹⁷⁾。」とあって、「八流れの幡」とはそのまま応神天皇であることが考えられ、首露王が「赤い風呂敷」に包まれ、降臨する叙述に響くものであり、后が海の彼方（龍宮）から赤い幡を翻しながら船に乗って訪ねてくる趣向に類似する。また、首露王は海の向こうの阿踰陀国（龍宮）の王女を迎え、仮宮で共寝して二夜を過ごし、また一昼が経た後、妻を連れて宮中に戻ってきたとあるが、これは玉依姫を祀っている安心院の「妻垣神社」の「共鑰山」や神武天皇の母方を祀る龍王山などの伝承に繋がるものである。『日本書紀』には神武天皇の母・玉依姫は龍宮から来るものとなっているが、これは首露王の后が海の向こう側（龍宮）から来る趣向に似ており、また伽耶国の祖先は竜王であった。

以上のように国宝宇佐神宮の伝承と伽耶国の首露王神話の伝承がよく考察してみれば具代的に一致しており、とても驚きである。すなわち、緒方三郎惟栄始祖伝説とも深く関わる宇佐神宮の伝承を通じて失われた伽耶国の祭儀伝承がわかり、また一方では伽耶国の始祖神話を通じて国宝宇佐神宮の八幡伝承の謎の部分の補うことができると、私は確信している。



「宇佐神宮本殿」



八幡神が鍛冶翁としてその姿を現したという「菱湯池」



亀トが行われたという「若宮殿」



宇佐神宮の下宮にある「兆竹」

6. おわりに 古代朝鮮半島と深く関わる緒方三郎惟栄伝説

「緒方三郎惟栄伝説」は、十三世紀に成立し、源平合戦を主題とした『平家物語』と『源平盛衰記』に伝わっている。

美しい娘のもとに大蛇の化身である素性の知れない水色の狩衣を着た不思議な男が夜な夜な通いつめ、やがて娘は身ごもり英雄が誕生したという「苧環型蛇婿入り」は、韓国では「夜来者伝説」という。

このような説話の古いものとしては、七二二年頃に成立した『古事記』の「崇神天皇」条に記されている。活玉依毘売というとてもきれいで美しい姫君が毎晩訪ねてくる姿や様子が優れている男と情を交わして身ごもった。父母はそれを不思議に思い、「汝は自ら妊みぬ。夫无きに何由か妊身めぬ」と娘に聞けば、娘は、「麗美しき丈夫有りて、その姓名も知らぬが、夕毎に到来て共住める間に、自然懐妊みぬ」と答えた。父母はその男の正体を知るために「赤土を床の前に撒き散らし糸を針に通し

てその男の衣の裾に刺しておきなさい」と言った。その通りにして明け方に見ると、その針糸はドアの鉤穴を通して外に出ており、残っている麻糸はただ三輪（三巻き）だけであった。その糸を辿っていくと、美和山（三輪山）に至っており、三輪神社に留まっていたのでその男の正体は神であることがわかった。この神は大物主神の子孫である「意富多多泥古」で、河内国の美努村（陶邑）に住んでいたと言い、この神が古代の豪族である三輪君と鴨君の祖先となったという。

『日本書紀』によれば上記の「意富多多泥古」という人を「陶邑」で見つけ出したとあるが、「陶邑」というのは須恵器を作った工人たちが暮らしていた村のことを言う。須恵器は宇佐神宮の八幡神が渡来されたという伽耶国（辛国）から五世紀中頃、海を渡ってきた硬く焼きしまった灰色の陶質土器のことで、「スエ」というのは現在でも韓国語で「鉄」を意味し、三輪山の祭祀跡から大量に出土しており、朝鮮半島（伽耶）の製鉄文化との深い関連を示してくれる。

神話学者で著名な松前健氏によれば五世紀中葉頃に朝鮮半島から渡来して来た技術工団で、和泉地域の須恵器を焼く陶工の一族の中で、三輪山の大神主神の後裔と主張する者が存在し、この人が三輪山とその神を祭祀する権限を掌握したと言い、大和政権がこれを承認したのであろう¹⁸⁾と言う。

また三輪氏の一族である山城の大神氏は楽器を扱う楽家で高麗楽である蘇志摩利などを伝授した氏族で、古代から朝鮮半島の軍事と外交を担当した氏族として古代朝鮮半島と深い関連のある氏族であった。

「三輪山伝説」は『古事記』の崇神天皇条に記載されており、この伝説は第一〇代の崇神天皇と深い関連があることを示している。崇神天皇は別称で御間城入彦五十瓊殖尊（御真木天皇）^{みまきいりひこいにえのみこと みまきてんのつ}というが、前述のように伽耶国から渡来神とされる宇佐八幡宮の祭神・八幡神は「馬城峰」に降り、いくつかの場所を経て、最終的には亀山に祀られたとあり、八幡神の降臨の場所の「馬城峰」と崇神天皇の「御間城」が一致している。

「御間城」の「御」は美称で、「間城」の「城（キ）」は「那」と同じ「村」「国」または「場所」を意味するので、「間那」と同じで任那の「マナ」を意味するので、崇神天皇は八幡神と一緒に伽耶国と深い関わりがある。

私は韓国の「薯童伝説」と関連が考えられる大分の「真名野長者伝説」の「真名」も『日本書紀』に登場する「麻那」と同じ人物で、おそらく伽耶系の百濟国の東城王の息子と考えられている。韓国の「薯童伝説」の主人公の「薯童」は父系が龍神であり、伽耶国の祖先も龍神であり、「真名野長者伝説」も奈良の三輪明神が関わっているので蛇の水神との関連を表している¹⁹⁾。

問題は七二二年頃に成立された『古事記』の「崇神天皇」条に収められている「三輪伝説」が古形なのか、一三世紀に成立した「緒方三郎惟栄」の始祖伝説が古形なのかであるが、『古事記』の「三輪伝説」が記録上では先であるのは確かであろう。

そうだとすると大和の「三輪伝説」がそのまま豊後国の「緒方三郎惟栄始祖伝説」になったと、簡単に決め付けるには多少無理があるだろう。それよりは豊後国の大神氏に伝承されていた「大神氏伝承」が大神一族の大和への移動とともに一緒に運ばれ記録として残ったものが『古事記』の「三輪山伝説」であると考えられる。一方豊後国の大神氏の始祖伝説は永い間口碑で伝承されていたが、一三世紀に至ってやっと記録として残るようになったと見るべきであろう。

以上で考察したように大神氏の始祖伝説は朝鮮半島と深い関連がある説話であることがわかる。日本には「緒方三郎惟栄始祖伝説」と類似した「芋環型蛇婿入り」の昔話が全国に伝承されているが、このような話型の昔話は中国をはじめ、東アジア地域に広く分布しているので日本のすべての伝承が朝鮮半島から伝わったとすぐに連断はできないであろう²⁰⁾。しかし少なくとも今まで論じてきた三輪氏とその一族である大神氏の由来を語る始祖伝承は朝鮮半島、特に伽耶国や百濟国から伝わった伝承であるといえるであろう。

大神氏の始祖伝説である「緒方三郎惟栄伝説」では、大神氏が姫岳山の山神の化身である大蛇の子孫とあるが、ここでいう姫岳山は現在、宮崎県と大分県の県境に位置した海拔一七五七・七メートルの山で、今は祖母山と呼ばれている。しかし、日本最高の歴史書である『日本書紀』には「添山」または「曾褒里能耶麻」と記録されている²¹⁾が、このことばは現在韓国の「ソウル」と同じ意味で、百済の都である「ソボリ」や新羅の都である「ソラボル」など同根のことばである。これは朝鮮半島の後百済の始祖の由来を語る「甄萱伝説」と類似性が見られ、「曾褒里能耶麻」の大蛇の子孫を主張する大神氏の始祖伝承とその祖先が朝鮮半島から渡来してきたことを表すものであろう。

注

- 1) 古代朝鮮文化を考える会編『古代朝鮮文化を考える』20(二十周年記念特集号)
- 2) 大分県旧三重町町民講座「真名野長者物語と韓国の炭焼長者」(2001、9、20)、『大分合同新聞<夕刊>』(2001、9、26)に「共通の伝説が刺激に」として報じられる。
- 3) 『三国遺事』巻二 紀異第二「後百済 甄萱」
- 4) 『平家物語』(延慶本)第四、『源平盛衰記』巻第三十三など。
- 5) 魯成煥氏『韓日王権神話』(韓国蔚山大学出版部、1995)
- 6) 『清川村誌』(『日本伝説大系』巻13、北九州編所収)
- 7) 『伝説民話史跡』(『日本伝説大系』巻13、北九州編所収)
- 8) 高野弘之「立命館アジア太平洋大学金ゼミ生の案内時(2006、6)の配布資料による。
- 9) 前掲注8)に同じ
- 10) 百済国の東城王は九州(筑紫国)から海を渡って百済王になったことが考えられるが、東城王の異称は「牟大」などであり、この「ムタ」は「湿地」の意味であり、ムタという地名を地図で調べたら、全国に87あって、そのうち84が九州に集中している(高濱幸雄氏<熊本地名研究会事務局長>「熊本の地名のあれこれ」『ふるさと寺小屋塾』23、ウェブサイト)。このことは東城王の異称「牟大」は九州と深く関わっており、東城王は湿地(水神)九州と深い繋がりのある人物であろう。
- 11) 徐大錫氏『韓国神話の研究』(集文堂<ソウル>、2001)
- 12) 竹折勉氏「宇佐の伝承と神話」(古代朝鮮文化を考える会編『古代朝鮮文化を考える』19)
- 13) 入江英親氏『宇佐八幡の祭と民族』(第一法規、1975)
- 14) 『東大寺要録』巻四
- 15) 前掲注13)同書
- 16) 河野弥進美氏「宇佐神宮 由来の案内」(立命館アジア太平洋大学 河野弥進美氏 講演会資料、2006、6)
- 17) 河野弥進美氏『妻麻垣略旧事記の解説』(2006、4)
- 18) 松前健『古代王権の神話学』(雄山閣 2003)
- 19) 前掲注1)同論文
- 20) 福田晃『昔話の発生と伝播』(名著出版、1984)
- 21) 巻第二「神代下 第九段」に「添山、此をば曾褒里能耶麻といふ」とある。

参考文献

- 芦刈政治(2002)「祖母嶽伝説とその周辺 - 伝承地を探る -」(立命館アジア太平洋大学 芦刈政治氏 講演会資料、6月) 同氏「祖母嶽伝説の成立考」(2007年春 金ゼミ国内フィールドワーク資料集『緒方三郎惟栄始祖伝説<祖母嶽伝説>の伝承地を歩く』2007、7、15)

大分の緒方三郎惟栄始祖伝説・国宝宇佐八幡宮伝承と韓国
その伝承地を訪ねて

佐藤芳延氏（2004）「祖母嶽「穴森」の蛇神 「怖ろしき者の末」緒方三郎惟栄の祖霊」（『三重文芸おおの路』
15）

高野弘之（2006）「緒方三郎惟栄伝承の地」（立命館アジア太平洋大学金ゼミ生の案内資料、6月）

中野幡能（1985）『八幡信仰』塙新書

ふるさと豊前中津の会・今永正樹編『豊前中津地方ふるさと歴史年表〈中津・耶馬溪・宇佐・築上〉』

渡辺澄夫（1990）『源平の雄緒方三郎惟栄』山口書店

付記1 本稿を作成するにあたって大分県豊後大野市教育委員会文化財課の高野弘之氏に道の詳細なご案内、資料提供などをいただいた。記して深く感謝申し上げます。また現地調査のときにいつもご協力をいただき豊後大野市企画部長の赤嶺信武氏にもお礼を申し上げます。豊後大野市に伝わる「緒方三郎惟栄始祖伝説」を最初にご案内を下されたのは豊後大野市文化財保護審議会会長の芦刈政治先生であった。いつもご教示いただいている芦刈先生にも感謝の気持ちを申し上げます。

付記2 本稿は「緒方三郎惟栄始祖伝説」についての調査報告書といえるもので、論文としては不十分なところが多い。この点については後日、稿を改めたい。